ＪＴＡトピックス　２０２０年１１月

左手骨折し、医師や両親の説得にも応じず昇級審査受験の意志を貫いた

薩摩おごじょ！

オオウラ　ハイジ
大浦俳紫　（鹿児島曽於跆拳道クラブ、小4）

長引く疫病禍により、多くの人々のやる気が萎えている最中、２０２０年１２月５日実施
日本テコンドー協会（以下、ＪＴＡ）鹿児島曽於審査会場において気合いとやる気を観じる出来事がありました。

審査官・河　明生宗師範をうならせたのは、骨折した左手にギブスをはめて受験した大浦俳紫（７級・水帯）。

彼女は学校で左手を骨折したため、準備していたＪＴＡ昇級審査受験を担当医師や両親が止めたところ
「絶対、受けたい！」
と固い意志表示。
両親も本人の意志を尊重し、受験に挑みました。

河　明生宗師範談

「１１月下旬、事前に、大浦の師である相良クラブ長から、

　ー大浦俳紫は左手を骨折していますが、本人の受験意志が固く親もおれ受験いたします

と相談を受けていた。

このようなケースは、女子では約４０年間のＪＴＡの歴史で始めてのことであり、

受けるだけでその根性に感心した。

だが、正直なところ左手を使う約束組手等の実技審査のレベルはあまり期待していなかった。

ところが、実技審査においても、骨折しているとは思えない機敏な動きだったので大いに感心した。

まさに、「薩摩隼人」に対比される「薩摩おごじょ」という概念を彷彿させる出来事だった。

日本中の人々が疫病禍でやる気が失せている最中、

僅か１０歳の鹿児島曽於の少女・大浦俳紫が見せてくれた気合いとやる気こそが、多くの大人達が見習うべき心意気だと観じた」